

学校が『一枚岩』になるための 具体方策

本誌19・20号では教師と子ども、子ども同士の関係づくりを考察しました。
今回は、それらを育む学校という環境をどう整えるか、
すぐれた成果を挙げた実践校に学びます。



名城大学大学院 大学・学校づくり研究科および教職センター 教授
曾山 和彦

そやま かずひこ*群馬県桐生市出身。東京学芸大学卒業、秋田大学大学院修士課程修了、中部学院大学大学院博士課程修了。博士(社会福祉学)
東京都、秋田県の養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事、名城大学准教授を経て現職。学校心理士。ガイダンスカウンセラー。上級教育カウンセラー。学校におけるカウンセリングを考える会代表。

著書に「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング」、「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ2 気になる子に伝わる言葉の「番付表」(明治図書)、「教室」でできる特別支援教育 子どもに学んだ「王道」ステップ 「ワン・ツウ・スリー」(文芸春秋)、「編著書に『気になる子への支援のワザ』、「気になる子の保護者への支援術」(教育開発研究所)、「特別支援教育に生かせるカウンセリング」(ぎょうせい)、ほか多数。

1 すばらしい実践を 実現した 学校のひみつ

私が今、いちばん関心をもっているのは、学校現場との「共同実践研究」です。子どもたち、先生方に、ある一定の期間かかわらせていただくことで、私の中に「仲間意識」が生まれます。そして、研究を終えたあとの達成感・充実感が他の何のものにも代えられないほどすばらしいからです。

本誌20号にて紹介した愛知県刈谷市立依佐美中学校(以下、依佐美中)に4年間かかわらせていただいたことは、私にとって大きな財産となりました。大学教員になつて8年、これまで、各地の学校と「共同実践研究」に取り組んできました。愛知県岡崎市立矢作北小学校、三重県いなべ市立山郷小学校、同員弁東小学校、同藤原中学校、石川県小松市立蓮代寺小学校、三重県亀山市立神辺小学校、三重県東員町立城山小学校等々、いずれもすばらしい学校、子どもたち、先生方でした。教育

に携わる者として、あらためて私は幸せだと感じています。
これらの学校には共通点があります。それは、学校が「一枚岩」となった実践・研究が展開されていたということです。

一人ひとり異なる経験、価値観をもつ教師集団が「一枚岩」となるために、「苦戦」を強いられている学校に出会うことがあります。
例えば、家族が登山をするとき、父親が日帰りでの登山を考え、母親が途中一泊しての登山を考え、両親の考えがまとまらなければ、「頂上に登る」というゴールは同じであっても、子どもは登山になど行きたいとは思わないでしょう。結局、どういう行程なのか見通しがつまず、両親の言い争いばかりが聞こえてしまうからです。

学校の実践・研究も同じです。「子どもを育む」というゴールは同じであっても、個々の教師がそれぞれのやり方で子どもの前に立ち続けるならば、子どもの成長は足踏みをし、歩みのあとの達成感・充実感は、子どもも教師も十分には得がたいのではないかと私は思います。

う思います。
本稿では、前述の依佐美中の実践研究を中心に振り返りながら、学校が「一枚岩」になるための具体方策を整理して紹介します。

2 先生方の声から 見えてくるもの

平成26年10月の研究発表会后、依佐美中の先生方に対し、「全校共通の実践・研究に向かうことができた理由」を問うアンケートへのご協力をいただきました。以下は回答の一部です。

● 校長の「みんなでやろう」という声がとても励みになった。

● 主題全体会で各部会の話し合いの場と発表の場を設け、職員の意識を高め共通理解を図ることができた。

● 各部会の話し合い、報告という流れで、トップダウンではなく自分たちで実践を創りあげている意識になった。

● 校長をはじめ、上の立場の方が忙しい中がんばっているのがよく見えたので、自分もついていこうと思えた。

● ベテランの先生方の研究に対する前向きな姿勢が若手の先生たちに影響を与えた。

● 「よさつぴタイム」は10分という短い時間で取り組むので、それほど負担を感じることなく継続可能であった。

● 「よさつぴタイム」の内容がシンプルで、誰もが行える手軽なものだった。

● 現職研修で我々自身がソーシャルスキルトレーニング(SSIT)の楽しさを実感できた。

● 4月のスタート時に研究方針を全職員で確認し、「よさつぴタイム」のやり方を皆で体験する研修を行った。

3 学校が「一枚岩」になるための 具体方策

1 常に「チーム○○」と意識づける

依佐美中が「チーム依佐美」として動くことができるようになったのは、リーダーである校長先生の声かけとともに、定期的に開催された「主題全体会」の存在が大

● どんなに忙しいときでもやると決めた「よさつぴタイム」に継続して取り組んだ。

● 「よさつぴタイム」のルールは三つ。これを全員が徹底した。

● 「よさつぴタイム」を時間割に組み込み、全校一斉で行ったことで、学校を挙げて行っている感覚になった。

● 曾山先生が何度も当校を訪問してくださり、生徒、教職員に心から接してくださった。

さいと思われれます。

先生方の声にある「主題全体会で各部会の話し合いの場と発表の場を設け、職員の意識を高め共通理解を図ることができた」「各部会の話し合い、報告という流れで、トップダウンではなく自分たちで実践を創りあげている意識になった」という声が、そのことを物語っています。

2 管理職、ミドルリーダーが、自ら「してみせる」

元中学校長である門脇氏は、勤務校の実践が「一枚岩」になった経験を振り返り、「学校には校長、教頭とは別に中堅の旗振り役が必要です。先頭に立って、額に汗するベテランが必要ですよ」(※)と述べています。依佐美中では、まさにその「旗振り役」が教務主任、研究主任であり、その他「額に汗する」ベテランの先生方が「してみせる」ことを日常的に行っていたからこそ、その背中を見続けた若手が育ち、「一枚岩」となり得たのでしょ。

*門脇将元「心得て候」飛鳥出版室 1998年 66p

③ 目的達成に向けた手段は「シンプル・おもしろい・ためになる」ものとする

私はかつて病弱養護学校に勤務していたとき、生徒の「関係づくり」のために、構成的グループ・エンカウンター(SGE)を活用した学級活動を行ったことがありました。当時、私の頭の中には、「エンカウンターは絶対におもしろいし、ためになる」という考えのみがあり、「シンプル」という視点は抜け落ちていました。その結果、人とかかわりが苦手な生徒には心理的な負担を与え、教材等の準備に多くの時間を割かれた私自身、アップアップの状態に陥ったことが、今も苦い思い出として時々思い起こされます。

本誌20号にて紹介した依佐美中の「よさびタイム」は、「シンプルおもしろい・ためになる」という三拍子がそろった活動です。だからこそ、依佐美中の先生方が、「よし、私も」と足並みをそろえやすかったといえるでしょう。

④ やると決めたことは全員で徹底する

話し合いを通して、「今年はこちらをやってみよう」と決まったのに、「私はそのやり方がなじまないでやりません」という人が一人でもいるとチームは機能しません。

私が「チーム」の力を強く感じたのは、かつて大学附属校で研究主任を務めたときでした。毎年6月開催の公開研究会に向け、子ども理解、授業づくり等々、さまざまに意見交換をする場をもちました。その席では、お互いが主張し合い、意見が平行線のままでまとまらないこともしばしば。そのような教師集団ではありましたが、ある一定の期間を経たあとには、全員での意見のすり合わせが始まるのですから、「さすがに先生方はプロ！」と思いました。

皆が足並みをそろえると、「チーム」という車のスピードは加速します。附属校には、「やると決めたことは文句を言わずにやる。その実践を経た上で、年度末、皆で実践を検証する場をもつ」と

クササイズ(心理的課題を用いた演習)→シェアリング(気づきの分かち合い)という一連の流れにより進められます。「よさびタイム」は、この二つの集団カウンセリングの理論・技法を、生徒の実態に応じて組み合わせながら行う活動です。「よさびタイム」の活動は、各学級、毎週1回、月曜日の5時限目の前、10分間を活用して主に担任が実施するもので、3つのルール「お願いします&ありがとう」「うなずいて聴く」「指示をしっかりと聴く」のつと、4人グループで行うことを基本としています。

よさびタイム

「よさびタイム」とは、依佐美中が考案した「ソーシャルスキル・トレーニング(SST)と構成的グループ・エンカウンター(SGE)のねらいを統合した短時間グループアプローチ」のことです。SSTは、主に行動理論をベースにした「行動の教育」であり、「インストラクション(言語指示)→モデリング(模範提示)→リハーサル(実行)→フィードバック(評価)」という一連の流れにより進められます。一方、SGEは、主に実存主義、ゲシュタルト理論をベースにした「感情の教育」であり、「インストラクション(言語指示)→エ

演習 質問ジャンケン の進め方

● ジャンケンで勝ったら1つだけ質問する
必ず次の項目から質問をしましょう!

- 出身(〇〇県〇〇市等)は?
- 行ってみたい外国は?
- 好きな食べ物は?
- 好きなテレビ番組は?
- 今度の日曜日にしたいことは?
- 好きな芸能人は?

● 負けた人は、質問に簡単に答える
● 答えにくいものはパスOK (1つか2つ程度)

「へえ〜、そうなの!」等、うなずいて答えを聴く

いう流れがあったと、今、振り返っています。依佐美中の先生方も全員が最初から「よさびタイム」に賛成していたわけではありません。「自分にはなじまない」という声や、私の耳に届いたこともあります。そうした中、教務主任、研究主任というミドルリーダーが先頭に立ち、「毎週月曜日5時限目開始前の10分間を使い、全校一斉に実施」という枠をつくったからこそ、「一枚岩」への一歩を踏み出すことができたといえるでしょう。

⑤ 外部の専門家を活用する

大学教員、教育委員会関係者等、教育に携わる者であれば、誰もが、よりよい学校づくり、子ども育成に関心をもっています。私自身、これまでの研究や実践によって培われた「生徒指導」「教育相談」「特別支援教育」という自らの専門分野を活かし、学校の役に立ちたいという思いが強くなります。同じことを言うとしても、校内からの声と外部からの声では響き方が違います。私は、校内研修

等で学校を訪問する際、校長や研究主任の先生方に、「必要ならば、どうぞ、私の口を使ってください。先生方の考えをお伝えします」と話すことがあります。専門性によって裏づけられた言葉は、より重い響きを伴って伝わりやすく、「一枚岩」づくりへの背中の一押しになることでしょう。

以上、依佐美中とのかかわりにていただいたように、外部の専門家に積極的に声をかけてみてはどうでしょうか。*****

中々で学んだことを、私の言葉でまとめてみました。皆さんの学校が「一枚岩」になるヒントを少しでも提供できたらいいかな。私でお役に立てることがあればいつでも声をかけてください。

菅山先生著書のご紹介

「軌跡」が「奇跡」を生む! 明日からでも「教室でできる」!

教室でできる特別支援教育

子どもに学んだ

『王道』ステップワン・ツー・スリー

Contents

- 第1章 「教室でできる特別支援教育」の基本的な考え方
- 第2章 教室でできる特別支援教育「王道」ステップ1・2・3
- 第3章 教室でできる特別支援教育「実践」へのアプローチ
- 第4章 紙上再現 自尊感情とソーシャルスキルを育む授業

判型 B5変型判
ページ 120ページ 2色刷
定価 本体1,600円+税
発行 文溪堂

菅山先生ホームページ・メールアドレスなど

HP ● KAZU・和・POCKET
http://www.pat.hi-ho.ne.jp/soyama/
e-mail ● kazu3623@hotmail.com
Blog ● Today's Pocket
http://kazuencounter.blog.fc2.com/